

京都大学

生態学研究センター・ニュース

No. 10

— 目 次 —

国際共同研究“共生生物圏 - 生物多様性を もたらす生態複合”の発足にむけて	1	ワークショップ「里山の現状」 - 報告 -	8
京都大学生態学研究センター研究会のお知らせ	3	国際セミナー (International Summer Seminar) -報告-	9
多様な生物の総体としての群集への新しい アプローチの模索・第2回研究会		第6回国際河川湖沼環境シンポジウム (韓国) に参加して	9
動物による種子散布		手塚泰彦	9
I G B P / G A I M 研究会		information	10
地球温暖化と極域生態系		研究協力員の方へ	11
京都大学生態学研究センター公開講演会の日程	6	編集後記	11
		今後のスケジュール	12

国際共同研究“共生生物圏 - 生物多様性をもたらす生態複合”の発足にむけて

昨今、生物多様性の保全がクローズアップされています。この生物多様性問題は、生物資源の偏在を反映した国際政治的な思惑をも内包し錯綜した構造をもっていますが、地球環境問題の一環をなす危急の課題として自然科学者が基礎的かつ実践的な貢献をもとめられている問題であることもまちがいありません。

生態学研究センターでは、IGBP (地球圏・生物圏国際協同研究) のコアプロジェクトである GCTE (地球変化と陸上生態系) の共同研究を推進するなかで、とくに生態的多様性の保全を課題とするプロジェクト Global Change and Ecological Complexity (GCEC: 地球変化と生態複合) を発足させるべく努力してきました。その一環として、今春、川那部が IUBS (国際生物科学連合) に “SymBiosphere: Ecological Complexity for Promoting Biodiversity (共生生物圏 - 生物多様性をもたらす生態複合)” と題する問題解決型の国際共同研究計画のたたき台を提出し (以下にその骨子)、リオデジャネイロで開催された地球サミットでも、大沢雅彦氏 (千葉大学理学部) とともに関連する各国の研究者と意見交換をすすめました。

こうした問題への日本の対応がともすれば‘受け身’になりがちであるという批判を払拭するためにも、生物多様性に恵まれた東アジアに位置する日本の研究者が中核となってこうした国際共同研究を推進して

いくことの意義はおおきいといえます。この生態学研究センターが窓口となって、IGBP-GCTEをはじめ IUBS や SCOPE (国際環境問題科学委員会) といった内外の関連組織と連携して、この共同研究計画の実現の道をさぐっていきたくていかにかかっています。

この国際共同研究計画の形成と提案にむけて、今年 12 月 17-19 日には計画とおなじタイトルの国際ワークショップを京都で開催する予定です (生態学研究センター、重点領域研究「地球共生系」、SCOPE-Japan 等の共催)。9 月 25 日の生態研セミナー No. 17 でも、センター・スタッフが話題提供を担当して、この計画に関連した議論をします。これらをはじめとして、さまざまな機会をとおしてみなさんのご助言とご協力をおねがいいたします。

共生生物圏 - 生物多様性をもたらす生態複合 骨子

地球上の生物の生活特性と機能の多様性の維持に、生態的な相互作用系の複雑性と生息場所の不均質性があいまって重要な役割を演じていることは、近年の研究があきらかにしてきたところである。こうした生態的な複雑性 (生態複合) はながい進化的、生物地理的過程をとおして生物多様性を培ってきたが、近年の生態複合の崩壊は、生物の表現型レベルおよび遺伝型レベルの多様性の急激な衰退をもたらしている。生物多様性の保全のためには、おのおのの生物種の保護策を講じるだけでは不十分であり、各生物をとおして具現されている生物多様性の活性を、適切な環境と生態複合ともども保全する方策が不可欠である。

そのためには、科学と実践が密接にむすびついた共同研究プロジェクトの推進が必要である。科学的側面では、さまざまな地域生態系において生物多様性にかかわる生態複合の実体を解きほぐし、とくに鍵となる相互作用系を特定することを目的とする。実践的側面では、それぞれ特定の生態系における生物多様性を、生態的多様性の具体的な内容、すなわち相互作用関係と生息場所の豊富さとの関係で評価し、生態複合の保全と修復のための定量的な規準を提出することを目的とする。この実践プログラムは、緊急な課題への対処にとどまらず、長期的な保全プログラム策定を視座にのせたものである。

生態研セミナー

CER Seminar ____ Center for Ecological Research, Kyoto University

生態研セミナー No. 17

1992年9月25日 (金) 13:30 ~ 17:00

於 京都大学生態学研究センター・講義室 (大津市阪本)

“生物多様性の維持機構と保全”

話題提供 (予定) : 井上民二・安部琢哉・藤田昇・甲山隆司・和田英太郎・成田哲也・遊磨正秀 (京都大学生態学研究センター)

京都大学生態学研究センター研究会のお知らせ

【多様な生物の総体としての群集への新しいアプローチの模索】

中間報告：

1992年度第1回目の研究会を6月6日、大阪市立大学文化交流センターで開催し、堀道雄氏（和歌山県立医科大学）が「タンガニイカ湖魚類群集における多種共存とスケールイーターの左右性」と題して話題提供を行った。

タンガニイカ湖に生息する鱗食魚は個体ごとに口の開き方について左右性（右利き個体は右方向に口を開き、preyの左体側の鱗をはぎとる。左利き個体はその逆）。そして、調査地での右利きと左利きの比率は1.0を中心に、振幅0.1、周期5年で振動していた。この多型の維持機構は、もしどちらかの利き手の個体が多くなった場合、preyがそれらの個体の襲う側への警戒を強めるため、それらの個体の鱗食の成功率が下がり、数の少ない逆の利き手の個体の適応度が上昇するという因果関係、すなわち、prey側の左右への警戒の配分を介した頻度依存選択により維持されているという考えで説明できた。頻度依存選択だけで種内多型が維持されていることを実証する初めてのケースではないかという関心もさることながら、研究会の議論は、種間でも同じ餌を異なった方法でとる場合には同様の共存機構が働くのではないか、このことがタンガニイカ湖のような生物間の相互作用が発達した群集の維持に重要な役割を果たしているのではないかという方向に発展した。

以後の研究会の予定は以下のとおり

第2回研究会

日 時：1992年9月5日（土）18時～20時

場 所：大阪市立大学文化交流センター

話 題：山本智子（京都大学理学部）

レイシガイダマシモドキが取り持つタイドプール群集間の関係

第3回研究会 1992年12月 京都大学生態学研究センター（大津市）

第4回研究会 1993年 1月（場所未定）

（文責：江崎保男（姫路工業大学自然科学研究所 / 兵庫県立・人と自然の博物館））

【動物による種子散布】

多肉果や堅果は動物に運んでもらって分布を広げる動物散布型の種子を持っています。多肉果は種子の外側を果肉で覆い、赤や黒の色彩で鳥を引き付けて運んでもらう、と言われていました。また鳥の陰に隠れてこれまであまり注意が払われていませんでしたが、ニホンザルやタヌキなどの哺乳類も多肉果の種子散布者としての役割を果たしています。ドングリなどの堅果類は、リスやネズミ、鳥ではカケス類に散布を依存しています。

樹木は種子をよりうまく動物たちに運んでもらえるようにさまざまな形質を進化させ、一方、果実に依存して生活する鳥や哺乳類は、よりうまく果実を見つけ、効率よく採食・消化できるように、また繁殖の季節を同調させてきました。送粉者としてのハチドリやマルハナバチとランの花に見られるような1:1対応ではありませんが、種子散布をめぐる「植物と動物の（拡散的な）共進化」が起こってきたといえます。

— 昨年の奈良の生態学会におけるフェノロジー研究会、昨年の鳥学会大会におけるシンポジウム、今年の名古屋の生態学会における自由集会和、ここ1～2年急速に、この分野に対する関心が高まり、種子散布の問題に興味を持つ若い研究者も増加しつつあります。

今回は十分な討論の時間を取り、果実と動物の関係において、現在、何が中心的な課題になっているのか、今後、この分野の研究をどういった方向に進めればよいのかなどについて、直接種子散布に関わる研究をしていない方々も含め、植物と動物、両分野の研究者が一堂に会してディスカッションを深めたいと思い、この研究会を企画しました。

世話人：上田恵介（立教大学・一般教育・生物）
野間直彦（京大・生態学研究センター）

開催日時：1992年9月22日（火）～23日（水・祝日）

場所：京大会館（211号室）

京都市左京区吉田河原町15-9（075-751-8311）

京都駅北口より市バス、A2のりば（no.206）か、四条京阪南座向いより（no.201か31）、ともに「近衛通」下車。三条京阪南口より京都バス、5番のりば（出町柳経由系統）、「荒神橋」下車。

時間：22日	13:00-17:00	シンポジウムⅠ（果実と鳥の諸問題）
	18:00	懇親会
23日	10:00-12:00	シンポジウムⅡ（堅果類の種子散布）
	12:00	昼食
	13:00-15:00	一般講演と総合討論

発表予定者

part Ⅰ 岡本素治（大阪市立自然史博物館）・湯本貴和（神戸大）

（22日午後） 植物はどのような論理で種子散布しているのだろうか

小南陽亮（森林総研・九州）

モミ・イヌブナ林におけるヒヨドリによるアオキ種子の散布

福井晶子（筑波大・生物科学）

果実種子のヒヨドリの体内滞留時間

岡内由香（大阪市大・理・植物生態）

種子・果実の栄養学的特性とエネルギー配分

下田勝久（大阪市大・理・植物生態）

植物の更新特性と種子散布

part Ⅱ 斎藤新一郎（道立林試）

（23日午前） げっ歯類による貯蔵・散布に適応した堅果の発芽特性

中村浩志（信州大）

カケスによるドングリ類の貯蔵・散布

part Ⅲ 一般講演（募集中）

（23日午後） 総合討論

問い合わせ：野間直彦

〒606-01 京都市左京区北白川西町 京大・生態学研究センター（京都分室）

電話 075-753-4251、4240（事務）、Fax 075-753-4253

【 I G B P / G A I M 研究会 】

I G B P (International Geosphere-Biosphere Program) のコアプロジェクトのひとつ G A I M (Global Analysis, Interpretation and Modeling) に対応して、地球圏と生物圏とのあいだの相互作用に関するモデリングをテーマとした研究グループが、本年2月に日本学術会議に発足しました。これを受けて、第1回目の研究会がさる5月29日に気象研究所で開かれ、続いて、第2回目の研究会がセンター研究会として以下のように開かれます。特に、地球全体を視野に入れたモデリング研究に関心のある方の積極的な参加を期待しております。また、発足して間もない研究グループですので、これからの長期的な研究方針や研究計画なども検討して行きたいと思っております。

開催日時：1992年10月1日(木)午後2時～10月2日(金)午後0時30分

場所：京都大学理学部動物講義室(動物学教室1階、百万遍前バス停から歩いて5分)

講師と演題：

1日(木)午後2時～5時30分

1. 木田秀次(気象研究所・応用気象研究部)
局地気候のモデル化について
2. 藤原一絵(横浜国大・環境科学センター)
衛星画像による世界の植生と地球温暖化による植生変化の解析
3. 佐藤信夫(気象庁・予報部)
陸面水文過程が大気大循環に及ぼす影響について

2日(金)午前9時～12時30分

4. 甲山隆司(京大・生態研究センター)
林木個体サイズ分布をベースにした森林動態の機能的モデル
 5. 中澤高清(東北大・理・大気海洋変動観測研究センター)
温室効果気体の変動と循環
 6. 田中 浩(名大・水圏科学研究所)
海洋における生物地球化学的サイクルのモデリングと古気候変動
- 【10月1日夜には懇親会(会費は4000円程度)も予定】

参加資格：所属などの制限は一切ありません。参加費は無料。

参加申し込み：なるべく事前に下記の京都大学生態学研究センターにハガキかFAXで申し込んでください。また、1日夜の懇親会への出欠もあわせてお知らせください。

〒520-01 滋賀県大津市下阪本 4-1-23 (FAX 0775-79-8457、TEL 0775-78-0580)

問い合わせ先：及川武久(筑波大学・生物科学系 TEL & FAX 0298-53-6661) または木田秀次(気象研究所・応用気象研究部、TEL 0298-51-7111、FAX 0298-55-7240)

【地球温暖化と極域生態系】

地球温暖化にともなう気温、降水量、あるいは生物にとっての水分環境は極域で著しいことが予測されています。そのような環境の変化に対し、極域陸上生態系の大きな変化が予想されます。今回の研究会では、このような環境と極域生態系の動態について、モデルと実際に行われた調査結果あるいは調査計画をまじえて議論の場にしたいと考えています。興味をお持ちの皆様のご参加をお待ちしています。

開催日時：1992年11月9日（月） 13時～17時

場所：京大生態学研究センター（滋賀県大津市）

講演内容

神田啓史（極地研）：南極昭和基地周辺の生態学的モニタリング

増沢武弘（静岡大・理）：北極域スピッツベルゲン島の温度環境と植物の成長

小島 覚（富山大・教養）：ITEXと北極域のバイオモニタリング計画

末田達彦（名大・農）：北極に森林があったころ

問い合わせ先：〒464-01 名古屋市 名古屋大学農学部 末田達彦

電話 052-781-5111 (ex 6303) Fax 052-781-4447

あるいは、京大生態学研究センター 杉本敦子

電話 0775-78-0580、Fax 0775-79-8457

京大生態学研究センター公開講座のお知らせ

生態学研究センター主催の1992年度公開講座を以下の日程で開催いたします。講座は各日14時～17時半に行い、各回お2人の講師にお話しいただきます。受講募集人数は100人で、定員になりしだい締め切ります。

10月24日（土） 京大・利・共同大講義室	岩熊 敏夫（国立環境研） 杉本敦子（京大・生態研センター）
10月31日（土） 京大・芝蘭会館	小泉 格（北大・理学部） 藤田 昇（京大・生態研センター）
11月 7日（土） BKビル（大津市島の関）	堀 道雄（和歌山医大） 未 定
11月14日（土） BKビル（大津市・島の関）	武内和彦（東大・農学部） 遊磨正秀（京大・生態研センター）

講座は有料で、受講者1人4630円です。受講希望者は下記の京大生態学研究センター宛はがきでお申し込みください。受講料は下記センター・公開講座係宛お送りいただくか、あるいは、第1回当日会場でお支払いください。

問い合わせ 京大生態学研究センター 成田哲也

電話 0775-78-0580、Fax 0775-79-8457

近年の、農業林業の変貌、燃料革命の結果、里山に対する依存度が減り、里山は、一見価値のない自然であるかのように、集中的に破壊されている。とくに、都市周辺の宅地造成、ハイテクランド、学研都市等は、そのほとんどが丘陵地に発達する里山を破壊して行われている「開発」である。このような状況に立ち至ったについては、生態学の研究者にも責任があるといえよう。事実、生態学の研究者は、里山のように人手のはいった自然の研究を、怠ってきた嫌いが無いとはいえない。しかも、各地の里山でのオオカの発見や多くの稀産植物の発見は、里山が想像以上に豊かな自然であることを示している。

生態学研究センターでは、このような現状に鑑み、里山の現状を知るために、1992年3月17～20日の四日間、ワークショップ「里山の現状」を開催した。約60名の参加をえて、熱心な討論が行われた。18～19日のワークショップのプログラムは次のとおりである。

話題提供

第一日 (10:00～17:00)

里山と絶滅危急種 村田 源 (大本花明山植物園)
里山の動物 山田 文雄 (森林総合研究所関西支所)
里山の自然誌 田端 英雄 (京大大学生態学研究センター)
絵図から復元する京都の里山 小椋 純一 (京都精華大学)
花粉分析から見た里山 松下まり子 (神戸大学教養部)
林政と里山 木原 啓吉 (千葉大学教養部)
討論

第二日 (10:00～17:00)

治山治水の歴史 大熊 孝 (新潟大学工学部)
里山の生物学的特性 守山 弘 (農業環境技術研究所)
市民による里山の維持管理 重松 敏則 (大阪府立大学農学部)
里山とゴルフ場建設 沢井 清 (京都・水と緑をまもる連絡会)
里山の価値 堂本 泰章 (埼玉野鳥の会)
関西の里山の現状 木下 陸男 (大阪自然環境保全協会)
討論

17日と19日には、里山の現状を知るために現地検討会をもった。17日には、近年、竹林の管理がずさんになったために、里山の森林が竹林によって置き換えられつつある現状を知るためと、放置されている里山に手を加えることによって里山の自然を回復させようとの試みがなされている現場を見学するために、京都府向日市と大阪府和泉市信太山の、里山を訪ねた。

このワークショップの出席者を中心に、里山研究会が発足し、里山研究会ニュースが発行された。この研究会は研究者ばかりでなく、広く里山の自然に関心を持つ人びととの参加をえて、里山の研究を進めたいと考えている。事務局は京大生態学研究センターに、ニュース編集部は森林総研関西支所に置かれる。第一回研究会が、9月19日に開かれる。

(田端英雄 京大大学生態学研究センター)

国際セミナー (International Summer Seminar) - 報告 -

さて、ご承知のとおり、今地球規模の環境問題に大きな関心が払われるようになりましたが、自然の保護・保全、あるいは破壊された自然の回復といった地球環境問題の解決は、生物群集や生態系の維持存続の機構や生物過程の解明をふまえてはじめて可能であり、その意味で生態学は、環境問題において大きな役割を果たす必要があります。しかし同時に、地球環境問題は、国境を越えた人類共通の問題ともなっており、国際協力は不可欠となっております。特にアジアの発展途上国の環境問題は深刻であり、それぞれの国で、環境問題に取り組む若い研究者および環境問題の実務担当者の育成は、緊急を要する課題であります。近年、日本でも数多くの国際会議が開催され、その他の国際交流も盛んに行われていますが、将来をになう若い研究者同士のいわば草の根の国際交流は十分であるとはいえません。現在大学院に学ぶ若い研究者が、10年後には第一線の研究者になることを考えると、若い研究者の交流は、必ずや近い将来成果を生むものと考えます。

本センターでは、こういった認識に基づいて、アジアの国ぐにの生態学の若い研究者（大学院レベル）を日本に招き、日本の大学院学生とともにセミナーに参加してもらい研修を深めるとともに、将来、共同研究をすすめるだけでなく、共同して問題解決の研究にあたる礎を築くために、国際夏期セミナー「地球環境と生態学」を今年度から開催することにしました。必要な予算全額を外部からの寄付によって賄うことにしており、今年が第一回であり予算の規模の制約から、招待者を韓国、中国、台湾の三国に限定しました。韓国から9名、中国から9名、台湾から1名の合計19名の応募者がありましたが、分野や予算等を考慮して、韓国の Seoul National University, Kanweong National University, Kyunpook National University から6名、中国の Peking University から3名、台湾の Taiwan National University から1名の合計10名を招待しました。しかし、残念ながら、中国からの招待者は、旅券が発給されなかったために、参加できませんでした。なお、日本からの参加者については、公募も考えましたが、予算の制約から、今年は京都大学の大学院生に限定しました。

外国からの参加者は、7月19日に来日し、日本の大学院生とともに、滋賀県希望ヶ丘文化公園内の青年の城に宿泊して、7月21日から30日まで、午前9時から午後5時まで、希望ヶ丘と生態学研究センターとで講義と実習が、午後7時から8時半まで Student Exchange Program（参加大学院学生の研究発表）が行われました。その後、7月31日から8月2日まで志賀高原へエクスカーションを行いました。8月3日は京都見物をし、8月4日離日しました。セミナーは好評で、外国からの参加者から、来年以降も継続して開催してほしいとつよい要請がだされて、主催者としてはおおいに意を強くしました。なお、講義と実習のプログラムは以下のとおりです。

21 July	Opening guidance General review An introduction to the biology and limnology of Lake Biwa	H. Kawanabe & H. Tabata H. Kawanabe Y. Tezuka
22 July	Limnological survey (by boat) Measurement of physico-chemical parameters and plancton collection	M. Nakanishi & T. Narita
23 July	Plankton survey	M. Nakanishi & T. Narita
24 July	Summary of limnological work Visiting The Shiga Prefectural Institute of Public Health and Environmental Science	Y. Tezuka, M. Nakanishi & T. Narita H. Tabata

25-26 July	Stable isotope in ecology	E. Wada
27-28 July	Ecology of termites	T. Abe
29-30 July	Himalayan ecology	H. Tabata

(田端英雄 京都大学生態学研究センター)

第 6 回国際河川湖沼環境シンポジウム (韓国) に参加して

手塚泰彦 (京都大学生態学研究センター)

標記のシンポジウムが 1992 年 7 月 2 日から 5 日まで韓国江原道春川市 (ソウルから車で北東へ約 2 時間) にある国立江原大学で開催されました。もともと、このシンポジウムはわが国の信州大学と韓国江原大学の陸水研究者の間の研究交流の一貫として始められたものですが、回を追うごとに日韓両国の他大学、および日韓以外の外国からも研究者が参加するようになりました。今回のシンポジウムには外国勢としては、日本 (参加者数はもっとも多く 9 名)、中国、インドネシア、米国、カナダなどの研究者が参加しました (韓国の参加者は数 10 名)。

前々回の第 4 回 (1988 年) も同じ大学で開催され、筆者は前々回と今回の 2 回とも出席することができましたが、この 2 回のシンポジウムに出席して強烈な印象を受けたことが一つありますので、ここに紹介させていただきます。

もともと、韓国には天然湖沼というものが一つもありません。したがって、韓国の陸水学といえば最近まで河川が主な研究対象でしたし、その成果もそれほどきわだったものではありませんでした。しかし、ご存じのように、韓国はソウル・オリンピック (1988 年) とあい前後して著しい経済成長を遂げました。それに応じて水需要が増大し、そのために大きな河川に多数のダムが建設されました。ところが、事情は日本と似ていまして、経済成長が進むにつれて、河川やダムの汚染・富栄養化が大きな社会問題となってきました。

これに刺激されたのかどうかはわかりませんが、ここ 10 年ばかりの間に韓国の陸水学は急速な発展を見せております。しかも、その主要な担い手は 40 代を中心とした中堅クラスの研究者たちです。彼らの研究はすでに国際的レベルに達しております。日本の陸水学は彼らに追い越されつつあります。このことは陸水学だけではなく、生態学の分野でも同じだと思われまます。日本の若手研究者の奮起を期待したいものです。韓国の若手研究者の急成長には、つぎのような研究者育成制度も大きく貢献しているように思われます。韓国では、国内で学位を取得した若手研究者は国費によって何年間か海外へ留学する機会を与えられるのだそうです。彼らはそこで新しい技を学び、国際感覚を身につけるのです。彼らの話す英語はわれわれの話す Japanese English とは違って、Korean English ではありません。

----- i n f o r m a t i o n -----

【里山研究会・第1回研究会】

日 時：1992年9月19日（土） 午後2時から5時

場 所：森林総合研究所関西支所

（話題提供）

京都府田辺における薪炭生産
里山の自然誌

南 五晴（打田薪炭生産組合）
田端英雄（京大生態学研究センター）

前号掲載ニュースの訂正！

【日本哺乳類学会1992年度大会】

日 時：1992年10月2日（金）～6日（火）

場 所：帯広畜産大学

日 程： 2日（金） 研究交流会，各種委員会

3日（土） 一般講演，研究交流会，評議委員会

4日（日） 一般講演，総会，シンポジウム，懇親会

5日（月） エクスカーション1（然別・糠平）

5～6日（月～火） エクスカーション2（知床）

会長講演が「日本の哺乳類学」（仮題）と題して行なわれます（10月4日に予定）。シンポジウムは、「大型獣の保護管理学 - その現状と展望」をテーマとして行なわれます（世話人：梶 光一・間野 勉・米田政明）。

連絡先：〒080 帯広市稲田町

帯広畜産大学野生動物管理学研究室

藤巻裕蔵・小野山敬一・柳川 久（電話 0155-48-5111 内線 466）

【日本鳥学会1992年度大会】

日 時：1992年11月21日（土）～23日（月：祝日）

場 所：大阪市立大学教養部

日 程：21日（土）評議委員会、自由集会（理学部）

22日（日）午前：スライド発表

午後：シンポジウム、総会、招待講演、懇親会

23日（月）午前：スライド発表

午後：ポスター発表、ビデオ発表、自由集会

シンポジウムのテーマは「熱帯雨林と鳥」（仮題）、演者には橘川次郎（クィーンズランド大学/オーストラリア）、中村浩二（金沢大学）、Pilai Poonswad（マヒドン大学/タイ）の各氏を予定しています。

連絡先：〒558 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学理学部動物社会学研究室

山岸 哲・堀田昌伸（電話 06-605-2584 直通）

【第15回極域生物シンポジウムの開催について】

日時：1992年12月9日(水)・10日(木)

場所：国立極地研究所 講堂

〒173 東京都板橋区加賀 1-9-10

JR埼京線板橋駅より徒歩15分、都営地下鉄板橋区役所駅より徒歩10分

(東板橋体育館すぐ近く)

主催：国立極地研究所

概要：国立極地研究所では南極及び北極や北方域で得られた成果について、研究発表、意見交換、討論を行うことを目的としてシンポジウムを開催しています。

第15回シンポジウムでは、9日の午前は「極域陸上生態系におけるモニタリング」、10日の午前は「海洋生態学におけるニューテクノロジー」をテーマとした講演があります。

両日とも午後はポスターによる一般研究発表が予定されています。

シンポジウムに参加し研究発表を行う研究者には、原則として旅費が支給されますが、研究生及び大学院生については若干名のみ支給できます。また、宿泊を希望する場合は、当研究所ゲストハウスが利用できます。

詳細は下記にお問い合わせください。

連絡先：〒173 東京都板橋区加賀 1-9-10

国立極地研究所 生物シンポジウム係

(電話 03-3962-4711 内線 368, Fax 03-3962-5743)

協力研究員の方へ：

生態学研究センターの公募研究などによる成果は、当センターの共同研究の一環としておこなわれた旨を Acknowledgments に明記していただきます。それ以外でも、生態学研究センター協力研究員としての研究で(も)あると触れてよいとのご判断でしたら、下記のように Acknowledgments に挿入していただければ幸いです。

. . . This study forms a part of guest scientist activities, Center for Ecological Research, Kyoto University. (当研究は京大大学生態学研究センター協力研究員業績である)

編集後記

・センターの関係する研究会等が多数予定されています。皆様のご参加をお待ちするとともに、センターニュース編集係では参加された方からの感想、御意見等もお待ちいたしております。

(A. S.)

京都大学

生態学研究センター・ニュース の問い合わせ先

京大大学生態学研究センター・ニュース編集係
